

これまでの世界大戦が「終わりのしるし」ではあり得ない決定的な聖書の根拠

(この記事では、JW 関係の方の読者を考慮に入れて、聖句はすべて「新世界訳」から引用しています。)

まずマタイ 24:7 を引用しておきましょう。

「国民（単数形）は国民（単数形）に、王国（単数形）は王国（単数形）に敵対して立ち上がり、またそこからここへと食糧不足（複数形）や地震（複数形）があるからです。」

単にこれだけの証拠で、このしるしは全面戦争どころか、2カ国以上関わっていないことが分かります。

敢えて解りやすく訳せば、「一国民は一国民に、一国は一国に敵対して立ち上がり」ということです。

このことはギリシャ語の単語を調べて見るだけで誰にでも確認できます。

以下に、ものみの塔聖書協会発行の「王国行間逐語訳」のコピーを載せておきます。

Will rise up for nation upon nation and kingdom
7 ἐγερθήσεται γὰρ ἔθνος ἐπὶ ἔθνος καὶ βασιλεία
upon kingdom, and will be famines and [earth] quakes
ἐπὶ βασιλείαν, καὶ ἔσονται λιμοὶ καὶ σεισμοὶ
down on places; all but these (things) beginning
κατὰ τόπους· 8 πάντα δὲ ταῦτα ἀρχή

「食料不足」や「地震」は複数形ですが、「国民」と「王国」は単数形で表されています。

「国民」（ギ語：エスノス）

「王国」（ギ語：バシレイア）

ちなみにそれぞれの複数形が見られる次の聖句と比べてみてください。

「ヨルダンの向こう側、諸国民（エスノン：複数形）のガリラヤよ」（マタイ 4:15）

「闇に座する民（ギ語：エスノン：複数形）は大いなる光を見…」（マタイ 4:16）

「あなた方は、わたしの名のゆえにあらゆる国民（エスノン：複数形）の憎しみの的となるでしょう」（マタイ 24:9）

「王国（ギ語：バシレイア）単数形のこの良いたよりは、あらゆる国民（エスノン：複数形）に対する証しのために…」（マタイ 24:14）

このように、この「国民」という語はその殆どの場合複数形で用いられています。

単数形で記されるのは希です。（全 163 箇所中、単数形は 21 箇所、その内マタイ、マルコ、ルカは平行記述の同内容ですので、ほぼ 88%は複数形です）

「国民」（ギ語：エスノス）が単数形で記されている聖句全リスト

マタイ 21:43; 24:7 マルコ 13:8; ルカ 7:5; 21:10; 23:2; ヨハネ 11:48;
11:50-52; 18:35 使徒 10:22; 10:35; 24:10; 24:17; 26:4; 28:19;
ローマ 10:19; I ペテロ 2:9; 啓示 5:9; 7:9 13:7; 14:6

そしてなんと、2つの例外を除いてすべて「ユダヤ人」を指していることが文脈から分かります。
その数例を引用してみます。

「この人は私たちの国民（エスノス）を愛し私たちのために会堂を建ててくれた人です」ルカ 7:5
「この男はわが民族（エスノス）を感わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、」ルカ 23:2
「ローマ人が来て、我々の神殿も国民（エスノス）も滅ぼしてしまうだろう。」ヨハネ 11:48

ですから「国民は国民に対して」という記述の最初の「国民」は「ローマ」で、後ろは「ユダヤ」
を指していると言って間違いないでしょう。

マルコ 13章やルカ 21章の平行記述も含めて、関係する国民や王国はそれぞれ2者だけであり、
世界大戦に関連付ける根拠は皆無です。

※「2つの例外」については、主題の論点からちよつとずれるので巻末に備考として記すことにします。

さてでは、啓示 6章の赤い馬についての記述はどうでしょうか。
次にこれを検討してみましょう。

「それに乗っている者には、人々がむざんな殺し合いをするよう地から平和を取り去ることが許
された。」一啓示 6:4

「ものみの塔」はこの 6:4 の「地」が全地、全世界であると示してきました。

そしてこれこそ、総力戦となった「世界大戦」を指し示す表現であると主張してきました。

一例：「火のような色の馬が続き、その騎手は全地から平和を取り去ります。」
「ものみの塔」 「2017年 No.3 黙示録の四騎士とあなた」からの引用

しかし聖句そのものは、単に「地から」と述べているだけで、それが「全地」であることを示す
表現は存在しません。

それどころか「地」（ギ語：ゲー）の全体を表現する場合、その前に「ギ語：ホーレン :all」 と
いう「全体、すべて」という語を伴って記されています。

「その時、天は三年六か月のあいだ閉ざされ、そのため大飢きんが
【全土】（ὅλην τὴν γῆν :all the land）を襲いました。」 - ルカ 4:25

ὅλην τὴν γῆν
all the land

「それは、【全地】の表に住むすべての者に臨むからです」-ルカ 21:35

「すでに第六時ごろになっていたのに、闇が【全地】に垂れこめて、第九時にまで及んだ」

-ルカ 23:44

「またわたしの名が【全地】で宣明されるため、まさにこのために、わたしはあなたを長らえさせたのである」-ローマ 9:17

「実に、「その音は【全地】へ出て行き、その発言は人の住む地の果てにまで行った」のです。

-ローマ 10:18

「それには七つの角と七つの目があり、その目は【全地】に送り出された神の七つの霊を表わしている」-啓示 5:6

「その致命的な打ち傷はいえた。それで【全地】は感服してその野獣に従った。」-啓示 13:3

「この事に関する話はその【地方全体】に広まった。」-マタイ 9:26

「しかし彼らは、外に出てから、イエスのことをその【地方全体】に言い広めた」-マタイ 9:31

最後の2つは範囲が全「地球上」でないことは明らかなので全「地方」と訳していますが、単語自体は啓示 6:4の「地から平和を取り去る」の「地」と同一です。

このようにギリシャ語本文は「地」全体を表す時には必ず「全」という別の単語を伴っています。これらの点から、「地から」という表現が「全世界から」平和を取り去るということの意味しているという主張には確かな根拠がないことが分かります。

むしろ単に「地」という表現には様々な広い意味があり、この語だけではその範囲も定かではありません。

「地」（ギリシャ語：ゲー：国土，土地，地面，土壌，地域，地域の住民）

文字通り「地球」を指す場合もありますが、場面によって様々な意味で用いられています。

それゆえに、この語は様々な単語に訳されています。

ギリシャ語：ゲー の現われる聖句の例

「あなた方は【地】[ゲー]の塩です」（マタイ 5:13）（地域の住民）

「自分のために【地上】[ゲー]に宝を蓄えるのをやめなさい。」（マタイ 6:19）（自分の生活圏）

「（すずめは）…その一羽も【地面】[ゲー]に落ちません。」（マタイ 12:9）

「ほかの種は【土】[ゲー]のあまりない岩地に落ち」（マタイ 13:5）

「舟は【陸】[ゲー]から何百メートルも離れていたが…」（マタイ 14:24）

「【地面】[ゲー]に横になるよう群衆に指示してから…」（マタイ 15:35）

そしてさらに決定的なのが、次の聖句です。

「…地の四分の一に対する権威が彼らに与えられた。」-啓示 6:8

「彼ら」というのは、白、赤、黒、青ざめたという色の四頭の馬の乗り手のことです。

世界大戦は「ものみの塔」も繰り返し述べているように確かに「総力戦」でした。
特に第二次世界大戦の参戦国は 60 カ国以上で、僅かな数カ国を除いて殆どがそれに関わりまし
た。

その 6:8 の「地」が仮に全地だったとしても、その「四分の一」にしか影響を及ぼせないのに、
どうやって残りの「四分之三」を含む「全地」から平和を取り去ることができるのでしょうか。
現実の世界大戦の規模（90%以上）を比較すると、まったく当てはまりません。
明らかに矛盾をきたしています。

ついでながら、疑問のオマケですが、ものみの塔では「白い馬」の騎士はキリストだということ
になっていますが、もしそうなら、どうしてその「権威（支配）」の及ぶ範囲が地の四分の一な
のでしょうか。

白い馬の乗り手の正体に関しては次の記事をご覧ください。
「127 終末期の悪の三位一体と偽預言者の正体」

備考：

先にリストアップした「国民」（ギ語：エスノス：単数形）がほとんどユダヤ人だけを指している
ことは聖書から確認できると述べましたが、例外と言えるのが次の 2 つです。
それは、使徒 10:35 と黙示 5:9 です。

「あなたはほふられ、自分の血をもって、あらゆる【部族】と【国語】と【民】と【国民】の中
から神のために人々を買い取ったからです。」 - 黙示 5:9

pasēs	phylēs	kai	glōssēs	kai	laou	kai	ethnous
πάσης	φυλῆς	καὶ	γλώσσης	καὶ	λαοῦ	καὶ	ἔθνους
every	tribe	and	tongue	and	people	and	nation
Adj-GFS	N-GFS	Conj	N-GFS	Conj	N-GMS	Conj	N-GNS
すべて	部族		国語		民		国民

英単語に下に記されている略語は、その単語の品詞や人称 / 時制 / 性別などを示すものです。
末尾の「S」は「Singular: 単数形」を表しています。
ちなみに複数形の場合「P - Plural」となります。

この【部族】【国語】【民】【国民】はみな単数形だということが分かります。
この 4 つ列挙されている頭に「あらゆる、全て」という意味のギリシャ語「パス :every」が置
かれています。

「あらゆる種族と言葉の違う民、あらゆる民族と国民の中から」新共同訳
「凡ての種族と国語と民と国民と（の価）から」塚本訳

「あらゆる…」なのにどうしてそれに続く語が皆、「複数」ではなく「単数」なのでしょう。このギリシャ語の単語についてこのように解説されています。

「pás (“each、every”) とは、適用される各々のパーツの意味での “all” を意味します。全体像の強調点は、「一度に一つ」です。」

(イマイチ分かりにくい説明ですが、とにかく、単純に「全部」という総体ではなく「各部分」に着目が置かれている語だと言うことのようなのです。)

この「ギ語：パス」は多くのところで「誰でも」という語に訳されています。

例：「【だれでも】(パス) 言うまじき侮べつの言葉で自分の兄弟に呼びかける者は」マタイ 5:22

ここで、あともう一つの例外の聖句「使徒 10:35」の出番です。

啓示 5:9 にある「すべて (パス)」と「国民 (エスノス (単数))」と同じフレーズが見られます。

「【どの国民でも】(every nation) 神を恐れ、義を行なう人は [神] に受け入れられるのだということがはっきり分かります。」 - 使徒 10:35

同じフレーズなのに、ここでは「あらゆる国民は」とではなく、「どの国民でも」と訳しています。「国民全部」ではなく、「義を行う」個人に注目し、それがどんな人種であったとしても例外なく全員…というニュアンスが伝わります。

それで、この2つの例外も、ユダヤ人を筆頭に他のそれぞれの国民にも神に祝福が及ぶということがわかります。

